

初乳給与の前に . . . まず子牛を温めてあげて！

S



初乳給与、もちろん早い方がいいのだけれど . . .

推奨例によって多少の差はありますが、一般的に子牛への初乳給与タイミングと量については「受動免疫の獲得のためには、少なくとも生後6時間以内に2%、12時間までに合計4%、24時間までに合計6%（合計体重の10～12%）を給与する」という感じだと思います。これは初乳中の免疫物質の腸管からの吸収能が生後最も高く、その後24時間ほどで消失するという根拠にしているのですが、特にタイミングについて「初乳は生後すぐに飲ませなくちゃ子牛が病気になるぞ、とにかく急げ！」とか「自発的に飲まないならカテーテルを使って流し込まなくてはいいじゃないか!？」と（やや神経質すぎる風に）とらえられてる感があるように感じます。

多くの酪農家さんで仕事をしていると、子牛（特に生後一週間以内）の病気のやや多めの農場と、ほとんど皆無というくらい少ない農場とがあります。この違いにはいくつもの要因が絡んでいるので一概言うことはできませんが、病気の少ない農場に共通しているのが「初乳を飲ませるタイミングを決して焦らない農場」であると感じています。

そういう農家さんが口をそろえて言うのが

★生まれたらまずは温める・乾かす。子牛の体が冷えてるうちは自発的にミルクを飲まない。温まれば勝手に吸い付く。

★呼吸が落ち着かないと飲まない。

★初乳を飲まなくても、一見元気そうなら半日以上放っておいても大丈夫（暖かい清潔な場所で）。

★カテーテルを使っていたこともあるけど、その頃はうまくいっていなかった気がする。

特に「子牛を温める・乾かす」ということがとても重要なキーワードのようです。子牛は母牛の子宮内ではほぼ母牛と同じ体温環境で過ごしています。生後間もない子牛は生理的な熱生産応答能も低いため、他のステージの子牛に比べて低体温になりやすい状態です。低体温になれば活力は低下し、悪くするとショック状態に進行し、とても初乳を飲むどころではなくなります。

自発的に飲んだ液体（ミルクや水）は第一胃に入ることなく直接第四胃に流入することで正しい消化吸収をうけません（第二胃溝反射）。カテーテルによる強制投与ではこの反射がおきずミルクは第一胃に流入してしまい、第一胃内での異常発酵と免疫物質の減少、腸への到達と吸収までの遅延などがおきることが予想され、期待するような効果はないどころかかえって悪影響のほうが目につきます。第一胃での異常発酵によりガスが溜まり、呼吸が苦しんでいる子牛を見かけます。こういう子牛が次の哺乳で自発的に飲むとは思えませんし、異常発酵は下痢とアシドーシスの原因にもなり、早い呼吸は呼吸器病感染のリスクを高めるでしょう。

病気の少ない農場の初乳給与は

「無理に急がず、暖かくして、待つ」

がキーワードのようです。

厳冬期に夜産まれた子牛を朝発見したようなケースでは熱いお湯のお風呂が一番効果的だと思います。ただしその後はジェットヒーターなどを使って乾かしてあげてください。